

第7回中之島映像劇場

日本の漫画映画の誕生と発展 草創期～1946年

——東京国立近代美術館フィルムセンター所蔵作品を中心に——

A History of Japanese Animated Cartoons: From Their Beginnings to 1946
Co-organized with National Film Center, The National Museum of Modern Art, Tokyo

■会場/その他:

国立国際美術館 B1階 講堂

入場無料、全席自由、※各プログラム入れ替え制です

■整理券:

*先着 130名 / 1名様につき1枚

*3月14日(金)は、15時よりAプログラムの整理券を配布します

*3月15日(土)と3月16日(日)は、10時より当日の各プログラムの整理券を配布します

■各プログラム詳細:

Aプログラム(105分/冒頭に解説付き): 2014年3月14日(金) 17時～

海外作品の影響と日本の漫画の創成

1920～30年代: 興隆期: 1: 大藤信郎作品選

歴史を辿っていくと、明治時代後期にはフィルムに直接印刷し、撮影を行わない形で漫画映画が作られていました。輸入品も含めて家庭で楽しんでいたとされますので、手回し映写により再現してみます。

日本で最初の漫画映画が製作・公開されたのは1917(大正6)年。幸いにして2007年、その内の一本が発見されました。今回上映する幸内純一《なまくら刀》です。

日本を刺激した海外の作品群をご覧いただいた後、1920年代から盛んになる漫画映画製作の第一人者の一人、影絵や千代紙を用いて製作していた大藤信郎の初期作品を、昨年(2013年)発掘された《のろまな爺》を含めて、まとめてご紹介します。

*本プログラムでは作品の上映順序が製作年代順になっていませんので、ご注意ください。

幻燈と動く玩具から漫画映画へ(35mm手回し映写機/映写と解説/8分) 松本夏樹所蔵/映写/解説

・作者不詳《活動写真【仮題】》(明治時代後期/35mm/1分(ループ)/サイレント)

・同時期の作品2本

松本夏樹: 1952年大阪生まれ。大阪芸術大学・武蔵野美術大学非常勤講師。芸術全般の視覚表現と精神史領域の関連研究の一端として、映像前史の幻燈や光学機器、初期映画フィルムとその映写機を収集し、映像文化史的観点からの再現上映研究を行っています。

海外秀作選(21分)

・エミール・コール(1857～1938年)《ファンターシュたちの恋のさやあて》

(1908年/フランス/ゴーモン/4分/35mm/サイレント)

Émile Cohl, *Drame chez les Fantoche*s

- ・オスカー・フィッシンガー (1900 ~ 67 年) 《光の交響楽 ルビンシュタインの光の踊り》
(1932 年 / 5 分 / 35mm / サウンド)
Oskar Fischinger, 12. Studie - "Lichtertanz"
- ・ロッテ・ライニガー (1899 ~ 1981 年) 《幸運の女神》(1930 年 / コメニウス・フィルム / 12 分 / 35mm / サウンド)
Lotte Reiniger, Die Jagd nach dem Glück

参考上映「海外作品アンソロジー (1930 年代)」(15 分) (16mm / 24fps / サイレント) 株式会社マツダ映画社所蔵

*家庭での観賞用に短くして市販されたものを集めています。

日本最初の漫画映画 (4 分)

- ・幸内純一 (1886 ~ 1970 年) 《なまくら刀 [デジタル復元版 / 白黒ポジ染色版]》
(1917 年 / 小林商会 / 2 分 / 35 ミリ / サイレント)
- ・北山清太郎 (1889 ~ 1945 年) 《浦島太郎 [デジタル復元版 / 白黒ポジ染色版]》
(1918 年 / 日活向島 / 2 分 / 35 ミリ / サイレント)

大藤信郎 (1900 ~ 61 年) 作品選 (40 分)

- ・《のろまな爺 [白黒ポジ染色版]》(1924 年 / 5 分 / 35 ミリ / サイレント) 神戸映画資料館所蔵
- ・《煙草物語 [不完全版]》(1926 年 / 東京自由映畫社 / 3 分 / 35 ミリ / サイレント / 染色)
- ・《馬具田城の盜賊》(1926 年 / 自由映画研究所 / 11 分 / 35 ミリ / サイレント)
- ・《黒ニャゴ [デジタル復元版]》(1929 年 / 千代紙映画社 / 3 分 / 35 ミリ / サウンド)
- ・《児童唱歌映画 村祭 [デジタル復元版]》(1930 年 / 千代紙映画社 / 3 分 / 35 ミリ / サウンド / デスメットカラー)
- ・《春の唄》(1931 年 / 千代紙映画社 / 3 分 / 35 ミリ / サイレント / 染色)
- ・《蛙三勇士》(1933 年 / 千代紙映画社 / 7 分 / 35 ミリ / サイレント / 調色)
- ・荻野茂二 (1899 ~ 1991 年) 《色彩漫画の出来る迄》(1935 年 / 5 分 / サウンド / カラー)

B プログラム (60 分 / 冒頭に解説付き) : 3 月 15 日 (土) 11 時 ~

1920 ~ 30 年代 : 興隆期 : 2

日本の漫画映画のいわば興隆期に当たる 1920 ~ 30 年代。《蟹満寺縁起》は影絵による作品です。監督の一人、木村白山は多数の玩具映画の作品製作も行なっていました。後に《飢餓海峡》(1965 年) を監督する内田吐夢も監督の一人でした。

山本早苗は北山清太郎のスタジオで技術を身に付け、後に自身の会社を設立。戦後は東映動画 (1956 年発足) に関わり、大資本によるアニメーション製作への道を開きました。

そして、多くの傑作をものにしたのが村田安司です。輪郭線による線画の描画力と絵の動きの点で、卓越した存在でした。

- ・奥田秀彦 (生没年不詳) ・木村白山 (生没年不詳) ・内田吐夢 (1898 ~ 1970 年) 《蟹満寺縁起【かにまんじえんぎ】》
(1924 年 / 朝日キネマ合名社 / 11 分 / 35 ミリ / サイレント)
- ・山本早苗 (1898 ~ 1981 年) 《教育お伽漫画 兎と亀》(1924 年 / 中島活動寫眞部 / 6 分 / 35 ミリ / サイレント)
- ・村田安司 (1896 ~ 1966 年) 《動物オリムピック大會 [サクラグラフ版]》
(1928 年 / 横浜シネマ商会 / 11 分 / 35 ミリ / サイレント)
- ・村田安司 《漫画 二つの世界》(1929 年 / 文部省 (横浜シネマ商会) / 11 分 / 35 ミリ / サイレント)
- ・村田安司 《新版 月の宮の王女様 [サクラグラフ版]》(1934 年 / 横浜シネマ商会 / 11 分 / 35 ミリ / サウンド)

C プログラム (109 分) : 3 月 15 日 (土) 13 時～

1930 年代 : 多様化と充実

昭和に入り漫画映画の製作が多様化してきます。アマチュア映画作家の田中喜次を含む童映社(京都市)は子ども向けの作品を作り、上映する運動を行なっていました。婦人之友社による《三匹の小熊さん》は、前衛芸術から左翼運動に投じた村山知義たちが監督しています。

大石郁雄の《動絵狐狸達引》が示すように作品の出来も向上し、とりわけ西倉喜代治の《茶目子の一日》は、実験的な試みが成功した印象的な作品となっています。

この時期、日本の漫画映画は二人の巨匠を生みます。政岡憲三と瀬尾光世です。政岡は京都に自らの漫画製作スタジオを建設、妥協を許さない製作態度で作品を世に送り出しました。「日本アニメの父」とも評されています。他方、瀬尾は政岡の弟子として漫画製作を習得し、後に独立。以後、数々の作品を発表していきます。《一寸法師 ちび助物語》では、漫画製作過程での繰り返しを作品に露呈するという一種の皮肉の味が利いています。

- ・田中喜次 (1907～82 年) 《煙突屋ペロー [1987 年再公開サウンド版]》
(1930 年/童映社/23 分/16 ミリ/サウンド)
- ・西倉喜代治 (生没年不詳) 《茶目子の一日 [パテートキー版/デジタル復元版]》
(1931 年/協力映画製作社/7 分/35 ミリ/サウンド)
- ・村山篤子 (1903～46 年)・村山知義 (1901～77 年)・岩崎昶 (1903～81 年)
《三匹の小熊さん》(1931 年/婦人之友社/12 分/35 ミリ/サイレント)
- ・大石郁雄 (1901～44 年) 《動絵狐狸達引【うごきえこりのたてひき】》
(1933 年/東宝教育映画株式会社/11 分/35 ミリ/サウンド)
- ・片岡芳太郎 (1907～82 年) 《漫画證城寺の狸囃子 塙団右衛門 (塙団右衛門化物退治の巻)》
(1935 年/日本マンガフィルム研究所/9 分/35 ミリ/サウンド)
- ・瀬尾光世 (1911～2010 年) 《お猿の三吉 突撃隊》
(1934 年/日本マンガフィルム研究所/9 分/35 ミリ/サウンド)
- ・瀬尾光世 《一寸法師 ちび助物語》
(1934 年/旭物産合資会社映画部/10 分/16 ミリ/サイレント) 株式会社マツダ映画社所蔵
- ・瀬尾光世 《のらくろシリーズ のらくろ二等兵》(1935 年/瀬尾発声漫画研究所/11 分/35 ミリ/サウンド)
- ・政岡憲三 (1898～1988 年) 《茶釜音頭》(1934 年/政岡映画美術研究所/10 分/35 ミリ/サウンド)
- ・政岡憲三 《べんけい対ウシワカ [断片]》(1939 年/日本動畫研究所/7 分/35 ミリ/サウンド)

D プログラム [99 分] : 3 月 15 日 (土) 15 時～

1930～40 年代 : アマチュア映画作家の活躍+中国からの発信

漫画映画の幅広さを示すものとして、当時のアマチュア映画作家たちの様々な試みが挙げられます。残存している作品が少ない中、荻野茂二は比較的多数のフィルムが遺されています。人形を使ったり、ヴァルター・ロットマンやオスカー・フィッシングーの影響を受けたような抽象的な実験。さらにはカラー映画への挑戦も行なっています(A プログラムでも1本上映します)。

日本に先駆けて中国で長編の漫画映画、《長篇漫画 西遊記・鐵扇公主の巻》が製作されました。ディズニー作品その他の影響を見て取れますが、日本の漫画映画界には大きな衝撃となり、興行的にも多数の観客を集めたと言われています。

- ・荻野茂二 (1899～1991 年) 《FELIX ノ迷探偵》(1932 年/10 分/35 ミリ/サイレント)
- ・荻野茂二 《?, 三角のリズム, トランプの争》(1932 年/4 分/35 ミリ/サイレント)

- ・荻野茂二《百年後の或る日》(1933年／11分／35ミリ／サイレント)
- ・荻野茂二《RHYTHM (リズム)》(1935年／2分／35ミリ／サイレント)
- ・荻野茂二《PROPAGATE (開花)》(1935年／4分／35ミリ／サイレント)
- ・荻野茂二《AN EXPRESSION (表現)》(1935年／3分／35ミリ／サイレント／カラー (キネマカラー))
 - ＊赤青2色のフィルターを使うキネマカラー方式による作品。
- ・萬籟鳴 (1900～1997年)・萬古蟾 (1900～1995年)《長篇漫画 西遊記・鐵扇公主の巻 [日本語吹き替え版]》(1941年／中華連合製片公司／65分／35ミリ／サウンド)

E プログラム (60分/冒頭に解説付き) : 3月16日(日) 11時～

1940年代 : ある頂点

既に日中戦争が始まり、太平洋戦争へと国中がなだれ込んでいく1940年代、日本の漫画映画はある意味で高揚期を迎えます。映画製作が国家統制下にあり、国策が圧力となっている一方で、作家たちはそれなりの自己の思いを貫いていたのではないのでしょうか(製作期間が伸びて、この時期に公開となったという経緯もあります)。

荒井和五郎はアマチュアから映画製作を本業とするようになりました。《お蝶婦人の幻想》のような影絵を使った叙情的作品で知られています。

瀬尾光世の《アリチャン》と政岡憲三の《くもとちゅうりっぷ》は、1940年代の傑作としてだけでなく、日本の漫画映画の達成を示す作品として重要なものです。

- ・荒井和五郎 (1907～95年)・飛石仲也 (生没年不詳)《お蝶夫人の幻想》(1940年／朝日映画／12分／35ミリ／サウンド)
- ・瀬尾光世《あひる陸戦隊》(1940年／文部省(芸術映画社)／13分／35ミリ／サウンド)
- ・瀬尾光世《アリチャン》(1941年／文部省(芸術映画社)／11分／35ミリ／サウンド)
- ・政岡憲三《くもとちゅうりっぷ [デジタル復元版]》(1943年／松竹株式会社／15分／35ミリ／サウンド)

F プログラム (145分) 3月16日(日) 13時～

1940年代 : 戦時体制下のプロパガンダと長編の試み

戦時体制の下、戦意を高揚させ、敵国への敵愾心を煽る、いわゆるプロパガンダ映画が製作されましたが、漫画映画に関しても例外ではありませんでした。あるいはこうした状況において、むしろ漫画映画の持つ訴求力に期待が掛けられたとも言えます。Gプログラムで紹介した荒井和五郎と飛石仲也が《ニッポンバンザイ》を製作しているのも、典型的な例でしょう。フィルムなどの資材不足の中、長編の作品が作られました。

瀬尾光世の《桃太郎 海の神兵》は既に空襲が激しくなり、営業している映画館も少なく、また、観客もあまりない頃に公開されました。若き手塚治虫が1945年4月に焼け跡が目立つ難波の映画館でこの作品を見ている。直後の日記の記述とは別に、後年、感激のあまり泣いた旨書き残しています。戦中と戦後を結ぶ逸話の一つと言えます。

- ・荒井和五郎・飛石仲也《ニッポンバンザイ》(1943年／朝日映画／11分／35ミリ／サウンド)
- ・大藤信郎《マレー沖海戦》(1943年／横浜シネマ／27分／35ミリ／サウンド)
- ・瀬尾光世《桃太郎の海鷲》(1942年／芸術映画社／33分／35ミリ／サウンド)
- ・瀬尾光世《桃太郎 海の神兵》(1944年／松竹株式会社／74分／35ミリ／サウンド)

G プログラム (40 分/冒頭に解説付き) 3月16日(日) 16時～

1946年：敗戦後の復活

1945年の敗戦からわずかの間に製作された作品群。つい今しがたの災禍を忘れさせるかのような希望に満ちています。この後さらに続く戦後の受難時代を越えて、日本の漫画映画は復活し、飛躍していきます。これらの作品には、そのことを予兆させるような印象さえ受けます。今回、多くを紹介した大藤信郎と政岡憲三がここでも活躍します。

政岡憲三の門下である熊川正雄が戦後加わるのが、1956年発足の東映動画。他方、Fプログラム解説で触れた手塚治虫は虫プロダクションを1962年に設立します。これらのスタジオを主流として、数多くの人々がうねりに飛び込むようにして生成した流れが、現代の日本の「アニメ」に至ったと考えられます。

- ・政岡憲三《桜(春の幻想)》(1946年/日本漫画映画社/8分/35ミリ/サウンド)
- ・大藤信郎《蜘蛛の絲》(1946年/三幸スタジオ/10分/35ミリ/サウンド)
- ・熊川正雄(1916～2008年)《魔法のペン》(1946年/京都映画社/11分/35ミリ/サウンド)

■おことわり:

- *各プログラムの作品、および、上映順に変更がある場合があります。
- *作品タイトルや監督名に関しては、東京国立近代美術館フィルムセンターのデータベース情報を基に、山口且訓・渡辺泰著/プラネット編『日本アニメーション映画史』(有文社/1977年)ほかを参考に追加しています。
- *作品の画面や音質の良くないものや、台詞が聞き取りにくい場合があります。歴史的な作品であることをご考慮いただき、ご了承ください。
- *フィルムは、特記以外は全て35mmです(9.5mmや16mmからの拡大複写版を含みます)。
- *フィルム所蔵は、特記以外は全て東京国立近代美術館フィルムセンターです。